慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	海の見える窓 : クリストファー・マーロウ、カンタベリー、そして新大陸
Sub Title	Window with a sea view : Christopher Marlowe, Canterbury, and the new world
Author	井出, 新(Ide, Arata)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2020
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.119, No.1 (2020. 12) ,p.19- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	巽孝之教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01190001-0019

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

海の見える窓 ── クリストファー・マーロウ、カンタベリー、そして新大陸

井出　新

リア・S・マーカスは、クリフォード・ギアーツの「厚い記述」という概念を借りながら、「不可解なシェイクスピア」を徹底的にローカライズすることにより、これまで顧みられなかった深い読みをシェイクスピア作品に対して行おうと試みた。[1] それにより、作家の想像力が、彼の生きたコミュニティーや地域社会での経験や繋がりに大きく影響されることを私たちはあらためて認識させられたわけだが、クリストファー・マーロウの場合は果してどうだろうか。マーロウがタンバレインやギーズ公、フォースタスといった登場人物を描く時、彼の想像力は海の向こう、とりわけ新大陸アメリカへと向かう。それは一体なぜだろう。本稿ではその問題を、彼が幼少期から青年期までを過ごしたカンタベリーというローカルな視点から考察してみたい。

I　カンタベリー

ロンドンの南東、イギリス海峡にほど近い古都カンタベリー。ローマ時代に築かれた城壁が小さな楕円形の町を取り囲み、その外側にはケント州の茫漠たる牧草地が広がる。町を北西から南東へと走る目抜き通りは、端から端まで約800メートルとささやかなものだが、その東側にそびえ立つゴシック大聖堂の偉観に圧倒されない者はまずいない。ジョン・リリーの散文ロマンス『ユーフュイーズとイングランド』（1580年初版）に登場するアテネからの旅人たちも同様だ。

落日の観を深めたとはいえ、まだなお麗しき古都カンタベリーに彼らは先ず

赴き、世に聞こえた大聖堂の威容に打たれ、彼らは茫然自失の体であった。[2]

この古都で生まれ育った文人リリーが誇らしげに、愛すべき故郷の歴史的遺産に言及した気持ちはわからなくもない。大聖堂の建立は1070年、ランフランク大司教の時代だが、その母体はさらに6世紀末、ケント王エセルバート庇護のもと聖オーガスティンが宣教活動の拠点としたクライスト・チャーチ修道院に遡る。中世には聖人トマス・ベケット廟への巡礼団をヨーロッパ各地から迎えていたイングランド教会の総本山だが、宗教改革の偶像破壊運動をくぐり抜けて「落日の感を深め」た。巡礼が落としてゆく金で潤った経済は、カトリック教会と聖人への信仰が失われるとともに凋落し、14世紀初頭に約8000人を数えた人口も、1524年には3000人にまで落ち込んだ。16世紀のケント史家ウィリアム・ランバードの嘆きは深い――「財貨失せ、聖地への敬信絶え入れば、必ず都衰え、やがて廃市と成り果てる。」[3]

目抜き通りの南東端、中心街からかなりはずれたところに、「殉教者聖ジョージ教会」と呼ばれるロマネスク様式の小さな教会があった。この教会を中心とする聖ジョージ教区には、ガラス屋、指物師、床屋、洋服屋、白目器物職人など、比較的貧しい人々が吹き溜まりのように集まっていた。1569年の教区調査によれば、聖餐を受けている教区民の数は208人。[4] 良くも悪くも結びつきの強い、貧しい世帯によって構成された共同体である。

ジョン・マーロウが、12キロ程離れたオスプリンジという村からカンタベリーに上京したのは1556年、20歳の頃。すでに故郷で手に職をつけてはいたが、靴屋として独り立ちする前に、ジェラード・リチャードソンという親方のところへ徒弟に入った。市民権を認めてもらい、晴れて商売を始めるには、その方が金も労力も大してかからずに済む。港町ドーヴァー出身のキャサリン・アーサーと知り合ったのは、それから程なくのことだろう。1561年5月22日、彼らは聖ジョージ教会で結婚式を挙げ、教会のほぼ向かいに家を借りて住み着いた。

住環境が良かったとは到底思えない。住居と仕事場、店を兼ねた自宅から、歩いてすぐの城壁門の脇には家畜市場。18世紀半ばにも、まだ毎週土曜日に市が開かれていた。[5] そして反対方向には畜殺場。屠られる家畜の悲鳴がしばしば辺りにこだまし、夏ともなれば血と臓物の耐え難い腐臭が辺りに漂った。

その家も教会も今はない。1942年6月1日のドイツ軍による空爆で失われ、教

会の鐘楼だけが遠い昔を物語っている。

ジョン・マーロウが市民権を取得し、靴屋の商いに弾みがついたのは、数年後のことである。ぽつりぽつりと徒弟も取るようになった。一方キャサリンは、大きなお腹を抱えて子供や徒弟の世話に忙しい。結婚からちょうど1年後、長女メアリが誕生したのを初めに、12年間で彼女は実に9度の妊娠・出産を経験している。この頃の女性は平均6〜7人を出産したというから、キャサリンはかなり子供に恵まれたということになる。[6]

しかし逆に言えば、それは度重なる危険と悲しみを背負うことを意味した。教区の近隣にロウズ夫人という産婆はいたが、当時、子供の死亡率は、医学の進歩した現代と比較にならないほど高い。[7] 出産は母子を大きな危険に晒すことであった。エセックス州の田舎牧師レイフ・ジョセリンは、いよいよ陣痛を迎えた妻を案じて、日記にこう書き記している。

> すべての摂理をもって我らを救いの喜びに与らせたまえ、と妻のために神に祈った。（彼女は、お腹の子に良くしてやれないのではと、不安に打ちひしがれている。）[8]

マーロウ夫妻もさして変わらぬ不安と恐れを陣痛の度に味わい、また幾度か悲嘆に暮れたことだろう。次男と三男、四男は生まれてまもなく没し、長女も6歳で夭折している。幼年期を生き延びたのは長男クリストファーと4人の妹たちであった。

> 我らの命は脆きもの。今日息絶えても不思議はない。
>
> （『タンバレイン大王』第1部、1幕1場68行）[9]

クリストファー・マーロウの誕生は1564年。出生に関する記録として残されたのは、「2月26日、ジョン・マーロウの男子クリストファー受洗」という、聖ジョージ教会の無機質な幼児洗礼記録だけである。当時の一般的な習慣から、実際の誕生日は洗礼式の数日前と考えてよい。男子を望む傾向はかなり強かったので、長男クリストファー誕生が両親、とりわけ父ジョンを喜こばせたことは想像に難くない。[10] しかしその喜びも束の間、彼らは大きな不安に突き落とされるこ

とになった。1563年から全国的に蔓延した疫病が、カンタベリーでも猖獗を極めたからである。翌年、聖ジョージ教区は最も疫病被害の大きい教区の1つに数えられた。[11] 幼いクリストファーが「死の陰の谷」を歩み抜けたのは、幸運以外の何ものでもない。

クリストファーに幼児洗礼を授けたのは、聖ジョージ教会の教区牧師ウィリアム・スウィーティングであろう。もとはといえば、洋服屋兼教会書記だったが、カンタベリー大主教マシュー・パーカーによる聖職叙任の乱発に伴い、聖ジョージ教会牧師に急遽任命された。[12] 本来ならばこの教区に牧師のなり手など見つかるはずもない。教区民の供出する「10分の1税」をかき集めても、満足な牧師給すら賄えない貧しさなのだ。聖職者としての訓練もまともに受けていないスウィーティングがこの教区に赴任したのは、彼が奇特な人物だったこともあろうが、イングランド国教会のご都合主義によるところが大きい。エリザベス女王即位後、人々の間に根深く存在するカトリシズムへの郷愁を断ち切り、国民をプロテスタント化するため、従順な牧師の全国的配備は急務だった。彼はこの教区に張り付けられたのである。しかしながら、にわか仕立ての改革は往々にしてぼろが出る。教区調査報告書によれば、スウィーティング牧師は説教が苦手で、大聖堂へと説教を聴きに行くよう教区民に勧めていたという。

聖職者としての資質はともあれ、スウィーティング牧師がマーロウ一家の良き隣人だったことは確かである。牧師の息子レナッドはクリストファー・マーロウとちょうど年の頃も同じ、しかもキングズ・スクールでは同期だから、2人が、そして両家族が、親交を結ぶ条件はある程度整っていた。レナッドは大学進学をせずに、フランシス・オールドリッチという教会裁判所の補助裁判官のもと、法律家としての道を歩み始める。愛書家だった彼の書棚には、法学書とともに、友人マーロウの詩集『ヒアローとリアンダー』が並んでいた。[13]

聖ジョージ教区に長く住んでいた指物師コーニーリアス・ゴッソンとその家族も、この界隈ではよく知られた存在だったろう。彼は1546年7月18日に聖ジョージ教会で食料雑貨商の娘アグネス・オクスンフォードと結婚している。[14] 長男スティーヴンはマーロウの10歳年上、キングズ・スクールの先輩にあたる。1577年にオックスフォード大学コーパス・クリスティ学寮を中退し、ロンドンに上京して芝居や戯作に手を染めたが、そののち国教会牧師に転じた。反劇場主義者だけあって劇壇には敵も多く、ある論敵は彼を「オランダの騾馬とイングランドの

雌馬から生まれた頓馬」と揶揄している。「オランダの騾馬」とは、北海沿岸低地帯からイングランドへ帰化した父コーニーリアスのことだろう。[15]

II　難民、急進主義、そしてアメリカ

ゴッソンのような帰化外国人はマーロウ一家にとって珍しい存在ではなかった。例えば、聖ジョージ教区のガラス職人で近所付き合いのあったハーマン・ヴァーソン、そして徒弟時代に世話になった親方ジェラード・リチャードソンは、2人ともドイツ系移民である。

> 戦で我が故郷の国を追われ
> 我らのイタリアを求めて、帆を上げ、海に出ました。
> （『カルタゴの女王ダイドー』、1幕1場217～18行）

生まれ育った国を出る理由は、今も昔も変わらない。宗教的・政治的イデオロギーゆえに迫害を受け、或いは戦乱で国内での生活が困難になる。利潤追求の風に駆られて新天地を求める。そういった難民や移民が海を渡り、ロンドンをはじめ、カンタベリー、サンドウィッチ、メイドストーン、サザンプトン、コルチェスターなど、イギリス海峡沿岸の都市へと流入した。カンタベリーの人口が1560年代には約3600人、さらに17世紀半ばには6000人と顕著な上昇を見せるのはそのためだ。[16]

かつて巡礼者で賑わった都は、今や難民で活気を帯びはじめている。

国策による計画的な外国人居住が、カンタベリーで本格化したのは1575年6月。ノルマンディーやフランドル地方から、フランス語を話すワロン人のプロテスタント難民が続々と町に流れ込んできた。主な居住区は町の北側、聖ジョージ教区に近い聖アルフィージ教区、或いは城壁外の貧民教区、聖メアリ・ノースゲイトなどである。[17] 7年後、市当局は早くも外国人の急増に危機感を強めている。難民受け入れに踏み切った行政当局の主な動機は、人道的支援よりむしろ、凋落した町の経済活性化にある。歴史的に見れば、彼らの目論見は功を奏したと言えるが、受け入れ体制が機能不全に陥るほどの難民急増は全くの予想外であった。慌てて移住者の頭数が数えられ、出自や渡英の理由、職業や宗教、さらに徴兵や

課税の可否が調査された。1582年の最初の人口調査では、女性と子供を含め、その数は1679人。町のおよそ3人に1人が外国人ということになる。[18]

難民の共同体は地域経済の活性化だけではなく、プロテスタント急進主義の浸透においても大きな社会的影響力をもっていた。海外に在住する親戚や友人とのコネは、ヨーロッパの政治情勢に関する大量の情報を難民だけでなく、市民にももたらしてくれる。大陸でカトリックがどれほど勢力を伸張させているか、同胞に対していかに凄惨な迫害を加えているか、カンタベリーはいわばプロテスタント系海外ニュースの一大受信地となった。イギリス海峡沿岸のケント州に急進主義が深く根付いたのは必然かもしれない。[19] しかも難民の間に流れている苛烈な宗教感情は、市民のプロテスタント的実利主義と相俟って、多くの感受性豊かな若者に飛び火する。ジョン・マーロウの最初の徒弟リチャード・アンバーフィールドもその1人だろう。のちにブライドウェル監獄に収監された同姓同名の分離主義者は、彼と同一人物の可能性が高い。[20]

生まれ育った土地や環境が、人の形成に与える影響は計り知れない。新天地を求めて海を渡った開拓者が、マーロウの身近にいたことも偶然ではないように思える。マーロウと同様カンタベリーに生まれ、学生時代をケンブリッジのコーパス・クリスティ学寮で過ごしたリチャード・ボイルは、大学中退後ほどなくして「全能の神の摂理により」単身アイルランドへ渡り、植民地化の動乱の中へと飛び込んでいった。[21]

また、生まれはマーロウより13年ほど後になるが、マーロウ一家の住む聖ジョージ教区の近隣住人で、食料雑貨商手伝いのロバート・クッシュマンも、カンタベリーの急進的熱気を胸一杯に吸い込んだ若者の1人である。カンタベリーのプロテスタント急進主義に培われ、分離派の終末論的な使命感を原動力に、彼はやがて家族とともにオランダのライデンに渡り、後のプリマス総督となるウィリアム・ブラッドフォードとともに、メイフラワー号による新大陸への航海を主導した1人だった。残念ながらスピードウェル号の水漏れのため、クッシュマンはメイフラワー号への乗船を見送り、フォーチュン号でプリマスに一年遅れて上陸することになったが、植民地開拓への情熱ゆえに、ピルグリム・ファーザーズから尊敬を込めて「使徒」と呼ばれた剛の者だった。[22] 1621年12月9日、プリマスで行われた説教で、ロバート・クッシュマンは、新しいイングランドに懐かしい故郷の面影を垣間見ている。

夏の暑さ冬の寒さはまったく同じ、平野でさほど高い山もなく、ケントやエセックスの風土のよう。沢や草原、小川や澄んだ泉も多く、まるでイングランドさながら。[23]

クッシュマンが新大陸アメリカに垣間見た故郷は、彼が生まれたケント州ロルヴェンデン、そして青年期を過ごしたカンタベリーだったに違いない。

クリストファー・マーロウが初めて異文化と遭遇したのも、まさに多感な少年の頃、カンタベリーに押し寄せるプロテスタント難民を通してであった。彼らこそ海の彼方を望み見せてくれる窓となったのだ。聞き慣れない言葉を話し、馴染みのない生活習慣を持つ外国人が近くの教区に居住している。しかも母方の叔父で、裁判所の執行吏を勤めていたトマス・アーサーとその一家は、1570年代から80年代にかけて、難民が集結していた聖メアリ・ノースゲイト教区や聖アルフィージ教区に住んでいた。[24] いやがうえにも少年マーロウの知識欲と好奇心は刺戟される —— この外国人たちはどこから、そして何のためにやって来たのだろう。その問いは大陸における迫害や戦乱の歴史に彼の目を向けずにはおかない。プロテスタント迫害に燃えるギーズ公爵は言う。

敬神の熱き思いに力を得て
出来る限り多くの軍勢を召集し
分派を起こす清教徒どもを掃討するのです。
いいですか、陛下、教皇は三重冠を売り払い
そう、あのカトリックのスペイン王フィリペも
必要とあらば私のために、インディアンに命じて
アメリカの金脈を根こそぎ提供させるでしょう。

（『パリの大虐殺』19場44～50行）

ギーズの背後にはローマ教皇の庇護があり、スペインの財政的な支援がある。さらにその向こうには莫大な財宝を彼らに供給する資金源、アメリカの新大陸が見える。地図を広げ、征服した領土を指でなぞるタンバレイン大王のように、マーロウもオルテリウスの地図を眺めながら、海を越えた遙か異国にしばしば思いを

馳せている。[25] そして彼の想像力が行き着く先には必ず新大陸アメリカがあった。

> 学識豊かなフォースタスがその気になれば
> これらの魔術書によって、宝を積んだ商船団をヴェニスから、
> 老スペイン王の国庫に毎年詰め込まれる金の羊毛をアメリカから
> 引き寄せることができるでしょう。
>
> （『フォースタス博士の悲劇』Aテクスト・1幕1場132〜35行）

Ⅲ　ケントの州民意識

海の向こうからやってくるのは移民や難民だけではない。軍艦を連ねた侵略者、襲撃挺に乗った略奪者など、イギリス海峡沿岸部の都市はその対応にも腐心している。

16世紀の歴史家ウィリアム・キャムデンによれば、カンタベリーの地名はサクソン語の「カントワラ・ビュリィ」（Cant-wara-byrig）、すなわち「ケント人の都」に由来する。[26]「ケント人」と言えば、その州に居住している人々を指すだけでなく、土地に住む人々の傾向や気風をそこはかとなく感じさせる。キャムデンは昔から語り継がれていた彼らの気質を次のように紹介している。

> かつてシーザーが感服した住民の教養の高さは今でも健在だが、剛胆さに及んでは言わずもがなである。某修道士の語るところによれば、ケント人は卓越した度胸が備わっていたため、イングランド軍の配備にあたっては、国軍の鑑として最前線を任されたという。[27]

テムズ川河口から南東に突き出たケント州は、サセックス、サリー、ミドルセックスの諸州と接する西側以外、北にテムズ、東と南にイギリス海峡を臨み、三方を海に囲まれている。必然的にケントは外敵に対峙する先鋒の役割を担うことになる。そういう土地柄が人々の間に強い防衛意識を育み、それが幾世代にも渡って彼らの気性を好戦的に成型したとしても不思議ではない。

ケント人が誰しも生まれつき勇猛果敢だということでは勿論ない。むしろ、「ケント人らしさ」の神話的な類型が先ずあり、それを意識して自己の成型を行

うことで、自らの社会的アイデンティティーを確立し、それが地域の気風を醸し出したということだろう。とりわけ16世紀は、この地域に共通する関心や問題が人々を結束させ、「州民意識(county consciousness)」を芽生えさせた時期に当たる。[28] これまで以上に「らしさ」が自覚され、地域を越えてそれが広く社会に認知されるようになったのだ。

シェイクスピアは人口に膾炙していたケント人の類型を巧妙に作品で用いている。その好例が『ヘンリー六世・第2部』に登場する「ケント生まれの頑固者」で急進派のジャック・ケイドであろう。一揆を起こして反乱軍をロンドンにまで導くが、移り気な民衆に見捨てられ、最後は空腹に耐えかねて庭園で食べ物を物色しているところを、庭園の持ち主で「君主を愛するケントの郷士」アレグザンダー・アイデンに退治されてしまう。しかしその負けっぷりがいい。

> ケントに言ってやれ、おまえは最高の土地っ子をなくしちまったと。世の中の連中には勧めてやれ、臆病者でいるがいいと。そうさ、誰も怖いと思ったことのない俺だが、空腹に負けた、勇敢な相手にではなく。
>
> (『ヘンリー六世・第2部』4幕10場71〜74行)[29]

トマス・ディロニーの『類い稀なる歴史物語』(1602年出版)では、ノーマンディー公の侵攻にも怯まず、州の特権を勝ち取ったケント人の武勇が称えられている。闘争心を燃え立たせるような唄を、ロンドンの市井の人々も口ずさんだのだろうか。

> 驕り高ぶるフランス人の惨めな捕囚となるよりは
> 代々守った自由が欲しい、たとえ何が降りかかろうと。
> 従軍して男らしく戦い、血海の戦場で息絶えたい
> 奴隷の軛に耐えるのは、忌み嫌うべきことだから。[30]

ともあれ時代は、そして国家は、鬱勃たる闘志をケント人に求めていた。

1588年、スペインのアルマダ艦隊到来。エリザベス治世下のイングランドが経験した最大級の国家危機である。枢密院は迎撃態勢の確立と兵の徴募に余念がない。カンタベリーでは徴募に応じた男たちの中から200人が選ばれ、軍団を結

成した。兵籍名簿には一兵卒として志願したジョン・マーロウの名前が見受けられる。実に52歳の夏。スペインの軛をかけられるよりは、従軍して雄々しく戦うことを彼は選んだ。しかも個人所有の武器として、弓を一張り、兜一つ、一振りの剣と斧槍を所持している。戦闘の準備はすでに整っている。軍団はノースボーンに野営をして沿岸の警備に当ったが、残念ながら、手柄はフィールドという名のスパイを捕らえただけだった。[31] 3年後の徴募でも、ジョンは再び兵籍に現れる。年を取ってなお彼の士気は衰えを知らなかったとみえる。おそらくクリストファー・マーロウは父の背中に、粗暴で血の気の多い、剛胆なケント人を見ていたのかもしれない。そして父の血は息子にも流れていたし、そのことを一番よく知っていたのも彼自身であったはずだ。

死と向き合っても動じない軍人の勇気を教えるために、タンバレインは自分の腕を剣で傷付け、息子たちに語りかける。

さあ、我が子らよ、指で私の傷に触れ、
両手をその血に浸してみよ。

（『タンバレイン大王・第2部』3幕2場126～27行）

軍人の剛毅な精神は、戦火をかいくぐることによって、或いは血海に手を浸し、士気を煽る雄弁に耳を傾けることによって鍛えられる。タンバレインは目で見、耳で聞き、手で触るという、経験によって体得される身体感覚を重んじるが、それはとりもなおさず、劇作家マーロウ自身の身体的、物質的な指向性に通底する。マーロウは剛毅な精神という形而上的な事柄を、身体に刻まれた血傷という物質的なレベルに一気に引き下げる。と同時に、タンバレインの血が、弟子トマスの聖書記事を連想させて、イエスの十字架上の血に重ねられるように、物質的な事柄を別の形で再び形而上的高みへと引き上げる。天と地を結ぶ落差にこそマーロウの筆の冴えがある。しかもこの場面で興味深いのは、英雄的な軍人の流す血が宗教的な崇高性を帯び、さらに新大陸の財宝に重ねられる点である。

この傷が帯びる栄誉と尊厳は絶大であり、
言わば財宝豊かなインドのダイアモンド、
サファイア、ルビー、純白の真珠を嵌め込んだ

つややかな黄金の玉座を
天蓋の下に据え、そこに
重厚な王服をまとって座すに等しい

結び

凛々たる軍人の聖なる刀痕と、海の向こうの新大陸。一見、何の関わりもない両者を結びつけているのは、マーロウのケント的な想像力というより他に説明の仕様がない。聖人崇拝によって栄えた巡礼の都は、カトリック的な聖性を剝奪され、軍国主義的なプロテスタンティズムという新しい葡萄酒を流し込まれながら、難民ひしめく多文化都市へと生まれ変わりつつある。マーロウがその落差を瞳に焼き付けていたとすれば、その時に、彼の想像力はカンタベリーという地理的環境によって独自の捻りを加えられたのだろう。

詩人の想像力や知性が、彼の生きた時代や社会によって、ある程度規定されるものだとすれば、ケントの精神的風土がマーロウの劇作家的資質を決定する環境的な要因のひとつとなったことは、これまで以上に強調されてしかるべきであろう。青年マーロウは、海の見える窓から世界を眺めたのだ。新大陸から吹いてくる風を肌で感じながら。

註

1 Leah Marcus, *Puzzling Shakespeare: Local Reading and Its Discontents* (Berkeley: University of California Press, 1988), p. 37. クリフォード・ギアーツの「厚い記述」については、"Thick Description: Toward an Interpretive Theory of Culture," in *The Interpretation of Cultures: Selected Essays by Clifford Geertz* (New York: Basic Books, 1973), pp. 3–30 を参照。

2 Leah Scragg, ed. *Euphues: The Anatomy of Wit* and *Euphues and His England* (Manchester: Manchester University Press, 2003), p. 185.

3 William Lambarde, *A Perambulation of Kent* (1826; rpt. Bath: Adams & Dart, 1970), p. 267.

4 William Urry, *Christopher Marlowe and Canterbury* (London: Faber and Faber, 1988), p. 7.

5 William Gostling, *A Walk in and about the City of Canterbury* (Canterbury: Simmons and Kirby, 1777), p. 47.

6 Roger Schofield, "Did the Mothers Really Die?: Three Centuries of Maternal Mortality in 'The World We Have Lost'," in Lloyd Bonfield, Richard M. Smith, and Keith Wrightson, eds. *The World We Have Gained: Histories of Population and Social Structure* (Oxford: Oxford Univ. Pr., 1986), pp. 231-60.

7 Roger Schofield and E. A Wrigley, "Infant and Child Mortality in England in the Late Tudor and Early Stuart Period," and Thomas R. Forbes, "By What Disease or Casualty: The Changing Face of Death in London," in Charles Webster, ed. *Health, Medicine and Mortality in the Sixteenth Century* (Cambridge: Cambridge Univ. Pr., 1979), pp. 61-95, 117-139.

8 Alan MacFarlane, ed. *The Diary of Ralph Josselin 1616-1683* (1976; rpt. Oxford: Oxford University Pr., 1991), p. 50.

9 クリストファー・マーロウの作品からの引用及び幕・場、行数はすべてレヴェルズ・プレイズ版に拠る。

10 長男の誕生を望む強い傾向については、David Cressy, *Birth, Marriage and Death: Ritual, Religion, and the Life-Cycle in Tudor and Stuart England* (New York: Oxford Univ. Pr., 1997), pp. 31-34を参照。

11 Peter and Jennifer Clark, "The Social Economy of the Canterbury Suburbs: The Evidence of the Census of 1563," in Alec Detsicas and Nigel Yates, eds. *Studies in Modern Kentish History: Presented to Felix Hull and Elizabeth Melling* (Maidstone: Kent Archaeological Society, 1983), p. 67.

12 ウィリアム・スウィーティングに関する情報についてはUrry (1988), pp. 8-9, 49-50を参照。

13 Urry (1988), p. 50.

14 この教区の洗礼・結婚・埋葬の記録については、Joseph Meadows Cowper, ed. *The Register Booke of the Parish of St. George the Martyr within the Citie of Canterburie of Christenings Mariages and Burials 1538-1800* (Canterbury: Cross and Jackman, 1891) を参照。スティーヴン・ゴッソンの生涯と作品については、William Ringler, *Stephen Gosson: A Biographical and Critical Study* (Princeton: Princeton Univ. Pr., 1942) が多くの有益な情報を提供してくれる。

15 Stephen Gosson, *The Ephemerides of Phialo* (London, 1579), STC 12093 , sig. A2., Urry (1988), pp. 9-10.

16 カンタベリーにおける移民の実態については、F. W. Cross, *History of the Walloon and Huguenot Church at Canterbury*, Huguenot Society of London, Quarto Series, vol. 15 (London, 1898); Irene Scouloudi, ed. *Huguenots in Britain and Their French Background 1500-1800* (Totowa, New Jersey: Barnes & Noble Books, 1987), chs 3-4を参照。また、

この時期の移民問題全般については、Bernard Cottret, *The Huguenots in England: Immigration and Settlement c. 1550-1700* (Cambridge: Cambridge Univ. Pr., 1985), pt. 1; Andrew Pettegree, *Foreign Protestant Communities in Sixteenth-Century London* (Oxford: Clarendon Pr., 1986) が詳しい。また移民を受け入れる側の問題を扱った研究としては、Laura Hunt Yungblut, *Strangers Settled Here amongst Us: Policies, Perceptions and the Presence of Aliens in Elizabethan England* (London and New York: Routledge, 1996) を参照。

17 居住区については、Anne M. Oakley, "The Canterbury Walloon Congregation from Elizabeth I to Laud," in Scouloudi, ed. p. 59-63を参照。

18 Cross, p. 36.

19 難民のコミュニティーが海外情報の受け皿となり、プロテスタント急進主義の興隆に大きな影響を与えたことについては、例えばPeter Clark, *English Provincial Society from the Reformation to the Revolution: Religion, Politics and Society in Kent 1500-1640* (Hassocks, Sussex: Harvester Pr., 1977), pp. 150-51を参照。

20 Leland H. Carlson, ed. *The Writings of John Greenwood 1587-1590* (London: George Allen and Unwin, 1962), pp. 323-5. 収監されたアンバーフィールドがジョン・マーロウの徒弟と同一人物である可能性についてはUrryが示唆している。Cf. Urry (1988), p. 23.

21 リチャード・ボイルがアイルランドへと赴いた信仰的動機についてはNicholas Canny, *The Upstart Earl: A Study of the Social and Mental World of Richard Boyle, First Earl of Cork, 1566-1643* (Cambridge: Cambridge Univ. Pr., 1982), pp. 23-24を参照。

22 ロバート・クッシュマンとカンタベリーの関係、及び彼らのプロテスタント急進主義については、William Urry, "Canterbury and the Pilgrim Fathers," *Kentish Gazette*, 4th, 11th, 18th and 25th September, 1970を参照。

23 Robert Cushman, *A Sermon Preached at Plimmoth in New-England December 9. 1621* (London, 1622), sig. A2.

24 Urry (1988), p. 16.

25 Ethel Seaton, "Marlowe's Map," *Essays and Studies* 10 (1924), 13-35.

26 Gordon J. Copley, ed. *Camden's Britannia: Kent* (London: Hutchinson & Co., 1977), p. 43.

27 Copley, ed. p. 3.

28 Michael Zell, ed. *Early Modern Kent 1540-1640* (Woodbridge, Suffolk: Boydell Pr. and Kent County Council, 2000), pp. 2-4. こういった州民意識については他にもDiarmaid MacCullochが*Suffolk and the Tudors: Politics and Religion in an English County 1500-1600* (Oxford: Clarendon Pr, 1986), chap. 3で指摘している。

29 シェイクスピアの作品からの引用及び幕・場・行数はすべてアーデン版（2nd Ser.）に拠った。

30 Francis Oscar Mann, ed. *The Work of Thomas Deloney* (Oxford: Clarendon Pr., 1912), p.

384.

31 Urry (1988), pp. 20, 30-31.